

# 聞名仏教

第122号 毎月発行  
(発行日) 2020年11月1日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒663-8113 西宮市甲子園  
口2丁目7-20  
JR 甲子園口駅下車歩4分  
電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始  
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8月は休み  
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月18日午後6時30分始

# 畢竟依はどこに

政府の援助  
によって自分  
を支えること  
はできません。

自分の名誉

や家柄や学歴や地位なり権  
力によって自分をささえる  
ことはできません。

「それは何ですか」  
「寿命無量・光明無量のア  
ミダ仏です」

無量寿・無量光のあたた

かいのちのはたらきに私  
はすでにつかまれており、  
そこから離れて一瞬も生き  
ること、存在することはで  
きません。私たちはアミダ

宗祖の『唯信鈔文意』に  
「みなともに自力の智慧を  
もつては大涅槃にいたるこ  
となければ」  
とあります。文言の意味を  
簡潔に言えば「人間の側か  
らのほからいによつては、  
真の平安にいたることはで  
きない」という意味です。

な能力を磨き上げること  
よつて、自分を支えること  
はできません。

あるいは技術力とか経営  
力を熟練させていくことに  
よつて、自分を支えること  
はできません。

あるいは自分の行いを正  
しくすることよつて自分  
を支えることはできません。

あるいは自分の内面を反  
省するなり心を浄化するこ  
とよつて自分を支えるこ  
とはできません。

そして自分の持ち物によ  
つて自分を支えることは  
できません。

自分の財産をたくさん貯  
えることよつて自分を支  
えることはできません。

自分の健康によつて自分  
を支えることはできません。

親や子供や友人などにお  
ける良き人間関係によつて  
自分を支えることはできま  
せん。

以上のことは皆、諸行無  
常であつて、移り変わつて  
やまないものです。ですが  
ら上にあげたまさまなも  
のは有用であり支えにはな  
りませんが、自分の人生全体  
を支えることはできません。  
それらは縁によつてあつ  
というまに変わる可能性が  
あります。「運命は一瞬にし  
て変わる」と言われるとお  
りです。

では私を支えるもの、私  
の全人生を支えることので  
きるものは無いのでしよ  
うか。

「あります」

「どこに」

「今ここにすでに与えられ  
ています。いつでも今ここ  
に、私がいるここに無条件  
で与えられています」

これが真に有り難いこと  
なのです。死ぬと言ふこと  
もその中のことです。これ  
を宗祖は「撰取不捨の真理」  
と教えてくださいました。  
私(全ての人)はアミダ  
仏の撰取不捨の用きの中に  
あり、あらしめられている  
のです。この用きが私たち  
の真実の支えであり、壊れ  
ない支えであります。

このアミダ仏が南無阿弥

陀仏という言葉となつて私  
たちに「汝を撰取して捨て  
ない、助ける」と喚びづめ

に喚んでくださっているの  
が口に出てくださるお念仏  
の声です。

(了)

自分の能力では自分を支  
えることはできないという  
ことです。  
自分の知性(考えなり教  
養なり)を高めたり確かな  
ものにしたということ、  
それでもつて自分を支える  
ことはできません。  
あるいは芸術的、身体的

# 第十七願の意味

浄土真宗の祖師親鸞聖人

(一一七三年から一二六二年)の主著は『教行証文類』

で、六巻になっています。

その中で「行巻」に私たちが浄土に生まれさせてくださる行法(はたらき)が説かれています。

この行法が南無阿弥陀仏というお念仏の行です。これが、アミダ仏が私たちをまるまる引き受けて助けてくださる法(行)なのです。

それゆえお念仏を溺れかけている者を助けに来てくださる救助船(如来の願船)にたとえられたり、不治の難病にかかっている病人を治してくださる特效薬(醍醐の薬)にたとえられたりします。

それでこの南無阿弥陀仏の行法が「行巻」に説かれているのですが、行巻のはじめに

「この行は大悲の願(第一七願)より出でたり」

といわれています。この行とは南無阿弥陀仏のお念仏のことです。

これがどこから現れ出てくださったかと言うとアミダ仏が法蔵菩薩の時に建てられた誓いである四十八願の中の第十七番目の願から出てくださっていると宗祖はいわれるのです。

今回このことについて少し述べてみます。

『仏説無量寿経』に依りますと、アミダ仏がもつ法蔵菩薩の時に一切の衆生を助けたいと願われ、長い間思惟して、その道を見出され、それを四十八通りの誓願として示されました。この誓願を成就せんがために長い間修行をして、一切衆生の助かる法を成就された、と説かれています。その法が南無阿弥陀仏の名号であります。

如来法蔵様は南無阿弥陀仏という言葉(名号)で一

切衆生救おうとされ、それを成就し、その名号を衆生に与えようとの願を建てられました、それが四十八願の中の第十七願であります。

では十七願はどのような願であるのか、それを今回は十七願に対して宗祖が名づけられた願名から伺ってみたいと思います。

第十七願は無量寿経では、「たとえ我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我が名を称せずは、正覚を取らじ」と誓われています。そして重ねて十七願を誓われた重誓偈では、

「我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」と説かれています。

宗祖が示された十七願の願名をあげますと、まず「諸仏称揚の願」「諸仏称名の願」「諸仏咨嗟の願」と言われます。

これは「我が名を称えるばかりでタスケル」という

第十八願の念仏(本願の名号)を十方の諸仏にほめられたたえ(称揚)られたいという願です。

本願の念仏を受け取るばかりで助かる、それほどに有り難く尊い名号であることを釈尊だけでなく、十方の諸仏、具体的には七高僧や宗祖などさらには多くの善知識方のご教化によって、ほめられたたえられるようにと建てられたのが十七願です。

こうした善知識のご教化によって私たちも「それじやあ、私もお念仏を申し、お念仏の救いを頂こう」という思いが起ります。もしだれも「お念仏は有り難いですよ、あなたの救いですよ」とお念仏の徳をほめてくださらなかつたら、お念仏を申す人はほばいないと思います。

諸仏である高僧方だけでなく、その方々に育てられてきた先祖や親や周りの人がお念仏の有り難さを語ってくれた、あるいはお寺の説教、また仏法の先生方の

本を読んでお念仏の救いを聞く、そういうことは広く言えば諸仏の名号讃嘆の活動におさまります。

〈咨嗟〉とはほめることですが、このように多くの先達がお念仏の有り難さをほめて、勧めてくださることを通して私たちもお念仏を申すようになるのです。

ごく卑近な喩えで申しますと、病気になった時、どのお医者さんに診てもらおうかを迷う時に、周りの人が「あの先生はよく診てくれるし手術も上手、いいお医者さんだよ」という話を聞いて、それじゃ私もあのお医者さんにかかろうという気がおこるようなものです。こうして諸仏の名号讃嘆を通して衆生にお念仏が受けとられていくようにと、如来法蔵様はお念仏を一切衆生に与え、弘めようとされたのです。

また十七願を「往相回向の願」「往相正業の願」とも宗祖は名づけておられます。これは名号を衆生に「与える」ことを回向といいま

す。

また、正業とは正定業のこと、正しく浄土に生まれることが定まる行業のこと、本願の念仏（名号）のことです。

そして往相とは往生浄土の相状ということで、浄土に往生していくことをいいます。その浄土に往生せしめて下さるのが本願の名号（念仏）です。

ですから「往相回向の願」とは本願の名号を往生浄土の行として衆生に回向（与え）して下さる願ということであり、その名号は正業（正定業）ですから、この正定業を回向して衆生を往生せしめようとの意味で「往相正業の願」をいわれるのでありましょう。

ここで〈回向〉ということですが、それはめぐらし向ける、他に与えるという意味です。

それでどのように本願の名号を回向されるかという点、諸仏善知識の讃嘆（説法）を通して、私たちにお念仏を称えさせ、お念仏の

お心を聞かせ、それによって南無阿弥陀仏の名において「汝をタスケル」「引き受ける」との念仏往生の誓いをお知らせくださるのです。それが回向です。

この様に、アミダ仏は南無阿弥陀仏という真実の言葉となつて救いの言葉を告げ知らせてくださるのです。私たちに南無阿弥陀仏として救済意思を表現して下さる、これを回向といえます。曾我量深師が「回向とは表現だ」といわれたのはこのことです。

ですから名号を回向するとは言葉である名号を称えしめ聞かせてくださることです。このことを十七願の重誓偈（無量寿経）には

「我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」と誓われています。宗祖はこの意味を非常に大事に見ておられます。このおこころを『正信偈』には

「重ねて誓うらくは名声十方に聞こえんと」

とか、『文類偈』には

「名声、十方に聞こえざることなし」と仰せられています。十七願は南無阿弥陀仏の名となつて、私たちに聞かしてくださるのです。

どこどこまでも名号を聞かせずにはおかないという誓いが成就して私たちは念仏を称え聞くことができます。

名号を聞かせることはアミダ仏の「我が名を称えるばかりでタスケル」という念仏往生の願心をそこに表現し、「マルマルタスケル」「引き受ける」の勅命として聞かせてくださるのです。私たちがお念仏を申すことになるのも、アミダ仏が称えさせたい、聞かせたいとの願心願力が働いていてくださるからです。

称え聞かせてくださるお念仏のお声はアミダ仏ご自身私たちに現れて、「ここにいて、汝をタスケル、引き受ける」と仰せくださるお姿です。

こうしてお念仏を称え聞いていると、縁が熟してといていましょうか、ふつと「助けるぞ タノメの親の喚び声の いまぞ聞こえし南無阿弥陀仏」

（香樹院師の歌）

となるのです。

私のような処にまで来てくださり、言葉となつて喚びかけて下さることによつて、アミダ仏の大悲のおこころが知らされるのです。私たちの処まで名号となつて来てくださるのは十七願のお働きがあるからです。ですから十七願を大悲の願とも言われるのです。

最後にもう一つ十七願を宗祖は、

「選択称名の願」〔略文類〕と名づけられました。この意味は、宗祖が拝読することを勧められました聖覚法印の『唯信鈔』に、

「一切の善悪の凡夫、ひとしくうまれ、ともにねがわしめんがために、ただ阿弥陀の三字（六字）の名号をとえんを、往生極樂の別

因とせんと、五劫のあいだ

ふかくこのことを思惟しおわりて、まず第十七に諸仏にわが名字を称揚せられんという願をおこしたまえり。この願、ふかくこれをころうべし。名号をもつて、あまねく衆生をみちびかんとおぼしめすゆえに、かつがつ名号をほめられんとかいたまえるなり。」

とありますが、如来法蔵様は衆生をどのようにして救うかを五劫という長い間考えられて、「名号をもつて、あまねく衆生をみちびき助けようとされたとあります。どうしたらば一切衆生を助けることができるかを考えて、アミダ仏の名である南無阿弥陀仏の言葉でもつて救おうとされたのです。

そのようにして名号を選択（選択）んで「名号を称えるばかりで浄土に生まれさせる」という念仏往生の誓い（十八願）を建てられたのです。

このようにアミダの名とこの言葉を選び取ってくださった願が十七願で、これ

を「選択称名の願」と言われるのです。

そして、この称名念仏の行を浄土往生の行と誓ってくださった、これが念仏往生の願で十八願の「乃至十念若不生者不取正覚」（すなわち十念に至るまで、若し生まれずば正覚を取らない）の誓いです。「ただ称えるばかりでタスケル」のお誓い

です。ですから十七願はまず称名念仏でもって衆生を救おうと名号を選び取られた願、それが十七願であって「選択称名の願」と名づけられたのであります。

ですから、称名念仏（名号）を選び取られたのは十七願、この称名念仏を衆生を浄土に往生せしめたもう行と誓われたのが十八願といえましょう。

以上のようなことで宗祖は『ご消息』に

「弥陀仏の御ちかいを、法蔵菩薩われらに回向したまえるを、往相の回向ともうすなり。この回向せさせたまえる願を、念仏往生の願

とはもうすなり。」

と仰せられています。

「回向したまえるを往相回向ともうすなり」で、回向すること誓われたのが十七願。そして「回向せさせたまえる願を、念仏往生の願」で、これが第十八願となります。

そこで十七願によって、念仏往生の願を本願の名号として私たちに聞かせてくださる。この本願の名号を聞くところに、念仏往生の大慈大悲のお心が不思議にも私たちの心に届いて信心となつてくださるのです。

このように真宗は「言葉によって救われる教え」という大きな特徴があります。

(了)

## 【住職雑感】

日本学術会議から推薦されたなかで六名の会員が政府に任命されなかったが、どうやらこれらの会員は自民党政府への批判的な人たちとのことである。こうした学者を排除するための任命拒否といわれてもしかたがないが、もしそうなら、政府の見解や政策に（よいしょ）する学

者ばかりを政府機関の身近に集めることになりかねない。そうなると過去の東西の歴史に鑑みて、もしあらぬ方向へ政治が暴走しかけた時にそれを止めようとする防波堤を失ってしまいかねない。いらざる心配であろうか。

バッハが好きでベートーベンは日頃好んで聴かないのであるが、たまたまyoutube で「月光ソナタ」を聴いた。演奏者は辻井伸行。音楽の国ドイツでの演奏で、耳の肥えた聴衆の集まる会場での演奏であったが、出だしの一音から胸にこたえた。僅かな時間であったが、素晴

らしかった。今まで様々な演奏者によるこの曲を聴いたがこれほど身に響いたのは初めてである。涙を拭かずにはおれなかった。ピアノ自体がいいのはもちろんであるが、辻井の奏でる音が非常に純粋

でしかも柔らかいく優しいのである。一つも（我）がない。素直で深く美しい。おそらくドイツの聴衆もこれほどに演奏する者が日本にいたのかと思わせる内容であった。辻井は日本を代表する演奏家にすでになっていると実感した。あのアシケナージが彼を称賛しているのもつともである。辻井のバッハはまだ聴いたことがないが、いつか聴いてみたい。

音楽を聴くのはめつぼう好きなのだが彫刻となると関心はごく薄い。しかし彫刻を見て思わず息をのんで感嘆した彫刻は四つほどある。一つはバチカンのサン

・ピエトロ大聖堂に安置されているミケランジェロの「ピエタ」である。（慈愛あふるる悲しみ）が見た瞬間に心の深部に伝わってくる像で、ミケランジェロのすごさを知らされる。そしてインド・仏陀初轉法輪の地サルナートの博物館にある仏陀像である。この前では思わずひざまずいて合掌せずにはおれないほど、美しく平和的でまさに理想的な造形物である。見るだけで心に浄らかで安らかな感情が湧いてくる。実際、どこの国からの参拝者か知らないが、ある婦人がこの像の前で思わず合掌しひれ伏したのだった。これこそ仏教のめざす理念を豊かに

表現した像である。また韓国の慶州郊外の石窟庵の中の仏像、それと奈良の東大寺法華堂の空羅索観音は「まことに莊嚴なるかな」の一言に尽きる。ほぼ同じ時代（八世紀）にできたものだからであろうか、伝わってくる感覚が大変よく似ている。石窟庵の仏、これは韓国人に言

わしむれば「世界一の仏像」というが、否定できないほどの傑作である。そして東大寺の空羅索観音は、平山郁夫画伯が、自分が画業に行き詰まった時に法華堂にきて、この観音像を拝んでふたたび立ち直ったといわれたのを思い出す。実際なんとも言えない威厳があり気品と迫力があつて日本一の彫像と言っても過言ではない。

念佛寺のある場所は市から配布されているハザードマップでは大雨による武庫川の氾濫、あるいは津波による氾濫のリスクがある地域でもあるので、洪水がおそつた時、緊急で何処に避難するかが多少問題であった。ところが近所と同じことを考えていた家があつて、どちらも家は二階しもなく、緊急避難所をどうするかを心配していたのである。結果、とり

あえず近所の家四軒の人たちで、三軒となりのキリスト教の教会（三階建てで屋上がある）を緊急避難場所にして頂けないかを牧師さんをお願いしたところ、快く引き受けてくださった。そして避難する部屋や屋上を皆で確認したことであった。有り難いことである。

## 《念佛寺報恩講についてのお知らせ》

毎年十二月二十二日に朝・昼行つておりました念佛寺報恩講の法要は今年午後（二時）のみの一回に致します。

また今回は法話のご講師をお招きしておりません。

なにしろ狭い仏間ですから密になり、新型コロナウイルスの感染リスクがありますので、高齢者の方、ご持病をお持ちの方は今回はお参りを避けて頂いた方がいいかと思ひます。報恩講の勤行は執行致します。